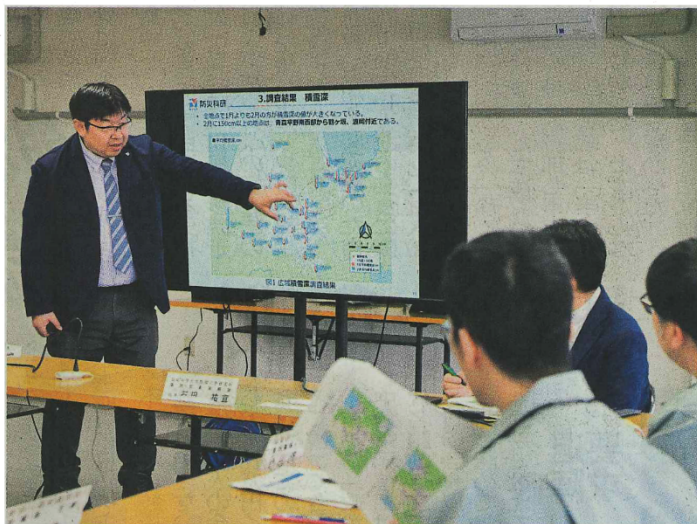


大量の湿った重い雪

防災科研と弘大 今冬の津軽地域調査結果



1立方メートルあたり400キロの高密度 雪害多発、除雪困難に

津軽地方を中心に県内で住家、非住家合わせて500件余りの被害もたらした今冬の大雪について、防災科学技術研究所雪氷防災研究センター（新潟県長岡市、中村一樹センター長 などは14日、「12月～2月としては1990年代以降でトップクラスの大量の湿った重たい雪」とする調査結果をまとめた。速報値で弘前市、青森市とも1月時点で積雪が1立方メートルあたり400キロと高密度になったといい、同センターは「この雪が道路の除排雪作業を困難にし、着雪による倒木・枝折れ、家屋倒壊や落雪の危険をもたらしていることが示唆された」とした。

（田中康貴）

県弘前合同庁舎で防災科研と弘前大学が「中南部地域雪の勉強会」を開き、関係自治体の担当課職員らに冰雪災害調査の速報として説明した。

調査は災害救助法が適用された津軽地方10市町村に西目屋村を加え、全28地点で実施。同学大学院理工学研究科寒地気象実験室（室長・石田祐宣准教授）も合同で調査した。まとめによると、積雪の密度は調査地点のほぼ全域で1、2月とも1立方メートルあたり350～400キロで、例年の3月並

今冬の積雪の調査結果について説明する中村センター長（左）

みに湿った雪だった。新雪の場合は1立方メートルあたり100キロ程度とされる。中村センター長は「従来のように降雪と積雪を深さだけで評価するのは不十分で、密度や重さ、乾湿など雪の質も併せて評価することが必要」と指摘した。

石田准教授は、歴代2位の最深積雪を記録した12、13年冬季と、今冬の降雪状況を比較。日に20センチ以上の降雪があった日数は12、13年の7日間に対し今冬は12日で、累計降水量は471ミリに対し567ミリだったこと

とから「将来的にいついかなどを予測して下力雪が増えるかもしれない」と述べた。